

東京大、英語民間試験の成績提出必須とせず 新大学入試

編集委員・氏岡真弓 2018年9月25日20時18分

東京大学（五神〈ごのかみ〉真総長）は25日に入試監理委員会を開き、2020年度から始まる大学入学共通テストで導入される英語の民間試験について、成績提出を必須としない基本方針を決めた。一定の英語力を出願資格としつつ、民間試験の成績を提出しなくても、受験生の高校が「同等の英語力がある」と判断すれば調査書への記入で十分とし、さらに事情がある場合は、受験生が理由書を提出すれば受験を認める。

民間試験は、英語の「読む・聞く・話す・書く」の4技能を測るために導入される、共通テストの目玉。一方、目的が異なる試験の成績を比較することや、受験生の住む地域や経済的な状況で格差が生まれることに懸念があり、活用方法を決めていない大学が多い。東京大が成績提出を必須としないことで、他大学への影響も大きいとみられる。

また、大学入試センターは23年度まで、「読む・聞く」の2技能を測る試験を続ける予定。国立大学協会は民間試験とセンターの試験の双方を全ての受験生に課すというガイドラインを決めており、基本方針はこれに反する。

関係者によると、東京大は基本方針で、言語能力の尺度に使われているCEFR（セファール）の、6段階で下から2番目の「A2以上」を受験生に求めると決定。確認手段として①民間試験でA2以上の成績②高校が、A2以上の英語力があると認めた調査書など③障害や病気などによって受けられない理由を説明した文書——のいずれかを受験生に提出してもらうという。A2は、文部科学省が「高卒段階で半数以上の生徒が達成することを目指す」としているレベルと同じだ。

基本方針は①を必須としない理由について「公平公正と実施の観点」としている。また、②を入れるのは「テスト対策で高校教育がゆがめられないようにするため」という。

東京大では五神総長が3月、民間試験について「公平、公正の担保が社会の要請に堪えるのか」という議論は、当事者として深めないといけない」と発言。入試担当の福田裕穂（ひろお）副学長も同月の会見で「今の状態では（合否判定に）使わない可能性が極めて高い」と述べるなど、慎重な姿勢を示してきた。学内のワーキンググループも7月の答申で①成績の提出を求めない②文科省などから納得のいく説明が得られた時点で改めて検討する③出願資格として使うが、例外も認める——の3案を提示していた。（編集委員・氏岡真弓）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.